

上野 香織（鹿児島大学教育学部附属中学校三年生）

「お坊さんと掛けまして、朝刊と解きます。その心は。」「袈裟着て（今朝来て）、経読む（今日読む）。」

これは、今話題の芸人ねづっちのなぞかけだ。同じ読み方でも意味が違う文へと早変わりするなぞかけは、目の前でマジックを見ているような面白さがある。お坊さんという言葉から袈裟を着て、お経を読んでいるという想像ができないわたしは、朝の新聞を読むというなぞ解きどころではない。考えてもみなかった言葉や言葉の掛け合わせの面白さを目の前でみせられて、「あつ、なるほど。」と楽しんでいる。なぞかけは、たくさんの日本語を知らないと作れないし、答えも思いつかない。すぐに「整いました。」となぞ解きするねづっちはすごいと思う。そして、わたしにいい日本語の多様性を気付かせてくれた。

先日、捕れたての四十キロ近いマグロを、知人の方が食べやすいようにして送ってきて下さったことがあった。お刺身を食べた瞬間、

「ヤバイよ、トロツとしてる。今までのマグロは何なの。」

と、わたしは大声を出した。すると、

「四時間もかかってさばいた甲斐があったわ。」

と母は喜んでた。母が喜んだのはなぜだろう。それは、「ヤバイよ」というわたしの言葉が絶品を意味していることを瞬時で理解したからだ。もともと「ヤバイ」は「危険である」の意味だが、最近、若者の間では「最高にいい」といったニュアンスで使う。これも日本語の多様性と言えるかもしれないが、この若者言葉については賛否両論ある。大切に守り伝えている役目が現代を生きるわたしたちにはあると感じた。また、母が喜んだ理由はもう一つある。それは、「トロツとしてる」というわたしの感想だ。これは、食感のオノマトペと言われ、食べた感覚を相手に上手く伝達できる言葉である。「さくさく」「まったり」「シユワツ」など食感のオノマトペは多様にあり、日本人のこだわりがある。特別な食感を相手とは違う微妙な表現で主張したい為に、自分の感覚にヒタリとくる言葉を使うおうとする。そして、多くの人々から受け入れられたオノマトペは共通の理解となり、日本の食文化に更に繊細さを生み出している。

さて、スポーツにもオノマトペがある。選手がパワーを出したりタイミングをとったりモチベーションを高めたりするなど、運動のパフォーマンスを向上させるのに効果があるらしい。ハンマー投げの室伏広治選手が投げる瞬間、「ソッガアー」と大声を発するのがそれであるが、卓球の福原愛選手の「サアッ」という叫び声もそれである。また、選手を指導する側にも、このスポーツオノマトペが情報伝達の有効な手段として役立つらしい。

例えば、ピンチに陥って浮足だっているマウンド上の投手に、「手の動きのタイミングを制御して、肩の力を抜いて遅めにボールを放せ。」とアドバイスしても頭に入らない。しかし、「ぐっと抑えていけ。」とアドバイスすると、「早く投げたい気持ちを抑えて、自分のペースで冷静に投げろ。」という監督の伝えたいことをすんなり理解させられる。単に「ふわっと投げろ。」と言えば伝わるのだ。この「ぐっ」や「ふわっ」にも相当な情報量が詰まっっていて、言葉に置き換えるのが難しい身体感覚や技術を的確に表現できる。このスポーツオノマトペも食感オノマトペと同様、人間の感情や動作、物事の本質までも自在に表現できる魔法の言葉のようだ。確かに、わたしもお習字の練習時に、先生にオノマトペで指導されていた。「横にスーッとほらって」とか「チョンとおいて」など、力や息の入れ具合、リズムが、このオノマトペで分かりやすく、身体を思うがままに操りながら字を書いていたのだ。言葉の力に驚かされる。

つい最近のことだが、こんなオノマトペが耳に入ってきた。

「飛行機がお空をビューッと、飛んでるよ。」

近所の幼稚園生の話にもっと耳を傾けると、頻繁にオノマトペを使っている。語彙力の少ない幼稚園生は、なんとか自分の気持ちを伝えようと、これを積極的に利用していた。

わたしは、この幼稚園生のように自分の気持ちを思うように伝える努力をしているだろうか。多くの日本語を知るようになったのに深く考えて会話をしているだろうか。相手に自分の気持ちをわかってもらおうとする姿勢は、日本語の面白さを知ったり、自分自身の心を豊かにしたりすることにつながる。だからこそ、たくさん日本語にもっと触れ、自分の気持ちを相手により正確に表現することを日々意識して生活していきたい。そうすることが周りの人と共感し合い、かかわっていくことにつながる。日本語は、その手段なのだ。